ル、コトニ爲リ十月廿八日夜東京驛ヨリ出發サル　文庫主任北浦〔大介〕書記モ隨行トシテ同伴セリ　旅行期間ハ一ヶ月ノ豫定ニシテ朝鮮經由滿洲鐵道ニ依リ十一月七日ニ北京ニ安着セラル

正木〔直彦〕校長一行の動靜

北浦大介氏からの來信を繰合すると十月廿八日東京驛を出發された正木校長一行は慶州、京城、開城に新羅、李朝、高麗の遺跡を訪ひ十一月三日平壤着、樂浪、高句麗の遺跡を見て四日奉天に、七日の夕北京着の由、

『奉天から北京までの汽車は通じてはゐるものゝ停車毎に兵隊が車中を調べに歩く樣子で物騒でした』『戒嚴令を布かれ居り候へ共各方面の歡待至らざるなく或は舊皇居内の傳心殿にて總理出席の盛宴あり或は宣統帝の弟親王の招宴あり或は皇族の來訪ある等えらい優待に恐縮致し居り候』『毎日無事各方面の御馳走攻めにあつてゐます。博物館や所藏家も見廻つてゐますが流石支那美術の名品が殘つてゐます。校長先生は一行中一番健康です』

本校創立第四十回記念日記事

十一月四日　實は十月四日がその實際の日なのだが、帝展の都合で毎年一ヶ月遲れを記念日と定められてゐる。それに今年は日本畫の結城〔貞松〕教授、圖案科の島田〔佳矣〕教授、柔道の井上〔縫太郎〕師範の各廿五年勤續の式とが兼ねて行はれた。但し〔正木直彦〕校長は支那へ旅行中の爲久米〔桂一郎〕教授が式を司られた。教授の言を約言すれば『我が美術學校も四十歳を經て相當の歷史を有するに至り社會的の存在や寄與も多くなつたから今後の學生は益々自重して行くべきである。』と云ふのであつた。式後能狂言二番に一同打寛ぎ晝食後雨模樣ではあつたが第二回の校内運動競技會が催された。小雨の中ではあつたが學生達はこの記念日の催しに皆大いに活躍して元氣を見せてゐた。

職員動靜〔二六―六。S・二・十二・一八〕

正木學校長歸朝

日支美術の提携を主唱しながら行きなやんでゐる東方繪畫協會問題解決のため去る十月下旬より渡支中であつた正木〔直彦〕校長一行四名（北浦、大介氏〔ママ〕、溝口禎次郎氏、田邊碧堂氏）は命を全し併せて滿鮮、支那の美術視察を終り十二月七日午前十一時三十分東京驛歸着元氣頗る旺盛出迎の庶務主任に「午後は學校へ行きます」と云はれた、芹澤〔閑〕氏恐縮「先一日御休養をと」再三の言にその日は出勤されなかつたが、翌日は定刻出勤些の疲れも見えず平常の通り執務せらる。（旅行談は次號に）

関連事項

① 入学試験科目の修正

昭和二年二月五日付『国民新聞』は次のように報じている。

東京美術學校が試驗に大英斷

鉛筆淡彩畫でよい

數學等も加へて今年から

上野の東京美術學校では、この二十一日から三月十五日まで入學願書を受付けるが、今年から入學試驗科目にかなりの變改が加へられた、先づ建築科、圖案科には實技の外に歴史、用器畫、數學、國語等を何れも中等學校卒業程度で課する外

特に日本畫科に於て從來毛筆のみに限られてゐた寫生試驗を、新に「鉛筆淡彩畫」でもよいと附け足して面目を新にした、これは中々の大英斷でかうすることによつて次の様な便宜が得られるのである、即ち

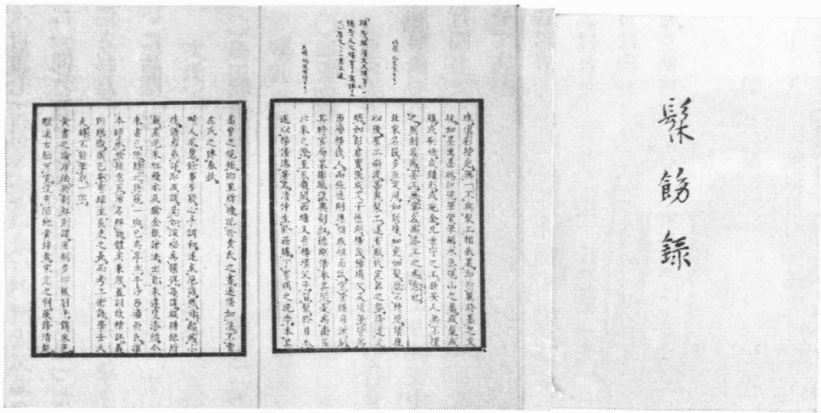
現在の中等學校の圖畫教育では一切毛筆を使用しないことになつてゐるので、美術家志望の青年は受驗の前に少くも一二年は專門の毛筆畫家に師事して置く必要があつたが、今回の改正で其の要がないのみならず、準備の爲めの毛筆畫風がその師風になづみ作畫上のわざはひとなつたことを全く除去し純な質で大にのびることが出來ると云ふにある。

この報道は、『東京美術学校校友会月報』所載入試問題（333頁参照。なお、この年から入学試験問題が同誌に掲載されるようになった。）によって確かめられる。日本画科の写生の試験において毛筆画あるいは鉛筆着色画の一方を選択することが許されたのは、必然的に毛筆画の衰滅をもたらすものであって、本校草創期の伝統復興路線はさらに一層細々としたものになったと言えよう。

②『髹飾録』の頒布

昭和二年十一月、漆工技法の専門書として貴重な『髹飾録』が体裁を改めて頒布された。頒布の事情については次の広告に詳しく記されている。

明　黄成著
民國　朱啓鈐氏刊本縮撮　髹飾録（二卷）一册



『髹　飾　録』

髹飾録は明の黄成の著す所にして支那に於ても唯一の漆工技法專門書なり。然るに此書の流布廣からざりしにや支那にても久しく軼書と爲り居り殆んど知るものなきに至れり。我邦にては僅に寫本にて傳はりしが其寫本すら天下數本に過ぎず。吾校には一部を存せり、曩に大村西崖先生の東洋美術史を著述されたる中に髹飾録が漆工家の珍籍たることを稱せられしを以て支那民國の朱啓鈐氏の知る所と爲り、遂に同氏の手に依り卷頭に詳細な